

東日本大会 有終の美

東日本大会 2006年11月12日 茨城県笠間市

木村佳司

歴史ある東日本大会が幕を閉じた。最後の東日本大会は有終の美を飾る素晴らしい大会となった。

期待通りの東日本大会

前日の雨が上がった茨城の森は、いままさに秋の色に包まれつつあった。「オンナゴコロと秋の空」と言われるが、この日は晴れたと思ったら時折小雨がパラつくような、くるくる変わる天気の中での開催となった。

会場の広大な芝生広場に集まった参加者は数百名。広い駐車場からも近く、家族連れ参加者にも優しい。

地図、コースも素晴らしく、満足の大会参加となった。

狙うは初挑戦クラス優勝

この東日本大会に参加するにあたって、いくつか期待があった。

佐白城跡を中心とする地域は、パーマネントコースが設定されており、本誌で以前に大高さんが報告されていた。なかなか面白そうな地域だと少し興味を持っていたところ、ここで東日本大会が行われるという。今まで茨城のトレインを殆ど走る機会に恵まれなかった。いい機会だ、これは行くしかないだろう。

運営は茨城県の協会メンバーに「ときわ走林会」が加わったメンバーが行うようだ。地図・競技面も期待できそうだ。

個人的な話だが、9月のクラブカップ・インカレロング運営が終わったあと、10月末の諏訪湖マラソンに向けてトレーニング。その勢いで全日本リレーのMEに復帰し、そのまま東日本大会まで突っ走ろうと考えた。今年度からM45の年齢に昇格し、その最初のJOA主催大会で優勝してみたい。狙うならこの東日本大会だ。

快走して辛勝

「笠間芸術の森」という最近造成された広大な公園の広い芝生広場が大会会場。公園内の丘陵地はどこも手入れが行き届いていて、これから始まるレースに期待を抱かせる。

M45Aのコースは前半と後半に分けられる。前半は山城「佐白城跡」の周囲をぐるりと回る。地図の精度はよく、読み易い地図でストレスなくどんどん進める。アップダウンはそれなりに厳しいが、足が止まるほどではない。茨城のヤブもこの季節になると通り易くなっている。

後半は「笠間芸術の森」周辺の丘陵地を巡る。手入れされた森林は通行可能度も視界もバツグン。等高線を読み意識的にレーススピードを上げて、森を突っ走ってゆく。オリエンテーリングの楽しみをたっぷり味わった。

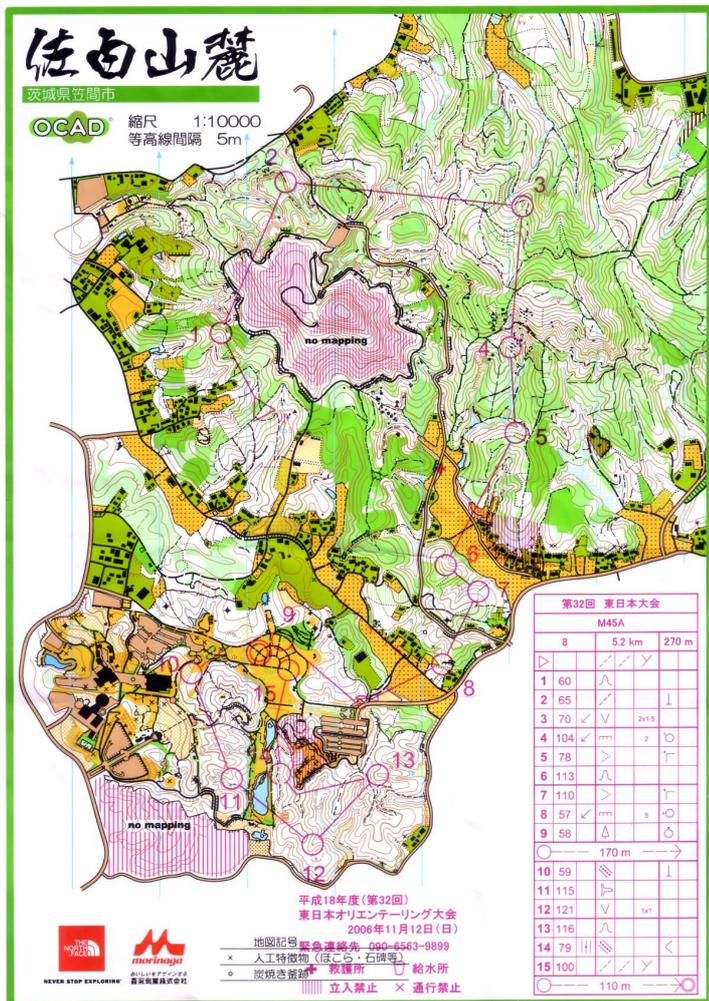
かくしてM45Aのトップスタートでトップゴール。「途中、バテてスピードが落ちたけど、これならイケたかな」と思える内容だった。

最終結果は辛うじて優勝。なんとか優勝させてもらったが、それほど甘い結果ではなかった。

男女選手権・茨城OB活躍

目を男女の選手権クラスに移してみよう。

男子選手権優勝は高橋善徳。女子選手権優勝は渡辺円香。いずれも茨城県にある筑波大学の出身である。男子選手権にいたっては上位3名すべてが筑波大学のOBだ。女子3位の齊藤早苗も茨城で活動している選手。地元ゆかりのある選手が大活躍という結果となった。



東日本大会 M45Aのコース図

男子選手権クラス(ME)で優勝した高橋善徳と3位の篠原岳夫。フィニッシュ後さっそくルート選択を振り返る。



平成 18 年度東日本大会優勝者

M21E	高橋善徳	1:22:40	みちの会
W21E	渡辺円香	1:14:40	ES 関東 C
M70A	磯部貞夫	0:46:46	OLP 兵庫
M65A	鈴木英一	0:49:24	横浜栄 OLC
M60A	河村健二	0:44:07	三河 OLC
M55A	小八重善裕	0:51:25	鈴亀 OLC
M50A	杉山隆司	0:53:16	サン・スーシ
M45A	木村佳司	0:52:21	長野県協会
M40A	岩倉毅	0:48:54	OLP 兵庫
M35A	香取伸嘉	1:03:39	京葉 OLC
M21A	羽鳥和重	1:17:59	川口 OLC
M21AS	利光良平	0:56:28	
M20A	千々岩瞳	0:50:18	東北大 OLC
M18A	宇野駿介	0:59:34	武相 OLK
M16A	小泉 拓	0:52:18	桐朋 IK
M14	遠藤豪志	0:36:50	東京 OLC
M10	宮本樹	0:14:50	京葉 OLC
MBL	久保田宏彰	0:42:39	福島 OLC
MBS	吉田 博	0:39:57	千葉 OLK
M-SEL	天笠真吾	0:38:52	金大 OLC
W65A	石田美代子	1:06:23	愛知 OLC
W60A	加藤伶子	1:01:48	入間市 OLC
W55A	海野とみ子	0:56:43	川越 OLC
W40A	齋藤まどか	1:05:54	川越 OLC
W35A	天野理香	1:11:21	横浜 OLC
W21A	宮本知江子	1:01:24	京葉 OLC
W21AS	砂川陽子	1:02:41	丘の上
W20A	新妻 道	1:07:35	
W10	小林璃衣紗	0:17:55	ES 関東 C
WBS	榎本清美	0:42:35	川越 OLC
W-SEL	小林美幸	0:42:47	金大 OLC

最後の東日本大会

JOA (日本オリエンテーリング協会) の改革が進み、伝統ある JOA 主催の東日本大会は今回を最後に廃止されることになった。今後の JOA 主催大会は全日本大会と全日本リレー大会、国際大会だけとなる。

東日本大会がどのような経緯で開催されるようになったのか、オリエンテーリング歴 26 年になる筆者・木村も実はあまり詳しくない。日本にオリエンテーリングが導入された頃から行われている伝統の大会だという認識だけで、その大会の意味を深く考えて参加している者はあまりいないというコトなのだろう。

東日本大会の歴史を振り返る

JOA の前身・JOLC が主催する大会の頂点として、全日本大会がある。全日本大会の下に位置づけられる大会として、東日本大会と西日本大会がある。ここまでが JOA や JOLC の主催する大会の範疇である。

さらに全国各地をブロックにわけて、各地でブロック大会が開催されていたと聞く。この中で現在も残っているの

は、中日東海ブロック大会だけとなっている。関東甲信越ブロックでは朝日新聞社主催の朝日大会というのが行われていたが、10 年ほど前に廃止されている。それ以前には関東甲信越ブロック大会というも行われていたらしい。

東日本大会が始まったころの理念は、各地区ブロックの上位大会として、存在した。しかしこの理念は長くは続かなかった。各地区のブロック大会がかなり早い時期から崩壊し、廃止されたからである。

公認資格需要の東日本大会

各地区のブロック大会が崩壊したあとも東日本大会自身は見直されることなく JOA の主催事業として開催され続ける。継続できた理由は数多くあるだろうが、各方面からの補助金やスポンサーシップがあったことが東日本大会を継続できた大きな要因だったろう。

参加者側から見ても、東日本大会は全日本大会に出場するための予選会としての位置づけがあった。

昔の全日本大会の A クラスには厳しい出場制限があった。東日本大会をはじめとした公認大会で規定時間内完走の実績が無ければ全日本大会の A クラス出場権が得られなかった。当時はそれほどオリエンテーリング愛好家の数が多かった。

形骸化した東日本大会

オリエンテーリング黎明期から、状況は変わった。国の行政改革が進み、行政からの支援が受けにくくなったことに加えて、バブル経済崩壊後の日本経済の低迷はスポンサー獲得にも苦労する時代となった。

オリエンテーリングのブームは去り参加者が減少してゆく中で、全日本大会の A クラス出場条件は緩和された。

全日本大会の予選会としての東日本大会の意味合いは選手権クラスのみとなってしまった。

さらに予算の縮小は、東日本大会を主管する都道府県協会を直撃した。予算規模の小さな都道府県協会では東日本大会を支える財力はない。東日本大会が地元に残る大きな利益を残してくれるなら引き受ける地区もあるが、多くは赤字をもたらすようになっていた。

「東日本大会を引き受けると、うちの協会は財政破綻する。」こんな都道府県が相次ぎ、次第に引き受けてくれる協会も無くなっていった。

「各地区ブロック大会と全日本大会の

間に位置し、全日本大会の予選会としての高い水準の大会を東日本各地で開催する。」

このような崇高な理念はもはやどこかにいってしまった。東日本大会とは名ばかりの形骸化した大会が、開催されるようになっていたのだ。

新生 JOA による改革

1 年半前から JOA (日本オリエンテーリング協会) の首脳が入れ替わり、こうした前例踏襲型の事業運営にもメスが入った。

その結果、今年から試行されているのが JOA 主催大会の絞込みと、JOA 公認大会の門戸を広げるやりかたである。

今回の東日本大会はそのちょうど狭間にあたる。今回のイベントは最後の東日本大会として開催されたが、大会の内容は大変素晴らしく、新生公認大会の理念も十分に組み入れた内容であった。

この最後の東日本大会は、今までの JOA 主催の東日本大会の枠組みと、新しい大会の枠組みのバトンをうまく渡したイベントとして、オリエンテーリング愛好家の記憶に残るイベントとなった。

(木村佳司)



空間の森を全力で駆け抜ける高橋善徳
JOA 主催・東日本大会男子選手権クラスの最後の優勝者となった。